

「オネエ所長の調査ファイル」 # 1 2

山崎浩治

1

「ゆうべ、韓流ドラマ見て徹夜しちゃった」

「所長は韓流好きなんですか」

「見るからに`男!、っていう韓流男子がたまらないのよ。彼らって何かというと女をおんぶするじゃない。あれ、あたしの憧れ! トオルちゃんも今度、あたしが酔いつぶれた時、おんぶして家まで連れてって!」

「お安い御用ですよ。そしたら所長をおんぶして山に運んで、そこに置いてきてあげます」

「いや〜ん、トオルちゃんのバカァ! それは姥捨山〜!」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が金沢市内にある民間病院の待合室で張り込み中だ。この日の市山は白いワンピースにニットのカーディガン、頭にリボンのカチューシャで「診察を待つ病弱なお嬢様」をイメージした女装をしている。ただし、メイクはまつげがバッチリ上がって、唇はグロスでツヤツヤ、マスカラもぬかりなしという、病人におよそ不似合いなものだった。二人は保険会社の査定部門から「自動車事故の被害者が後遺障害を主張して半年以上入院している。身体状況を調べてほしい」との依頼を受けて、被害者が入院する病院へやってきたのだ。

工場で勤務する派遣社員の健太(34歳)は半年前、自家用車を運転して自宅へ帰る途中、交差点の赤信号で停車中にレンタカーに乗った金沢市内の警備員・誠(36歳)に追突されて受傷。救急病院に搬送され、むち打ち症、頭部打撲と診断されたものの、いずれも軽症だったために帰宅した。

ところがその2日後、右手の痛みとむち打ち症特有の後頭部、頸部の疼痛、めまいなどを強く訴え、別の民間病院に入院、いまま理学療法や投薬などの入院治療を続けている。健太は「交通事故によって工場で働けなくなった」として、レンタカー会社が加入する保険会社に治療費や休業損害、入院慰謝料などを請求していた。保険会社はこれまで治療費や入院費、休業損害などの支払いを続けてきたが、長引く入院に痺れを切らし、「金沢プライベート・リサーチ」に調査を依頼してきたのだ。透が市山に尋ねた。

「保険会社の査定部門が調査を依頼してくるなんて珍しいですね」

「最近の査定部門は処理件数で会社から評価されるのよ。だから不正請求が疑われる、ややこしい案件は外部の調査機関に丸投げすることがあるの」

病棟の夕食が終わった午後6時過ぎ、首をコルセットで固定した私服姿の健太が病院エントランスに現れた。尾行すると、健太はタクシーに乗って最寄りのパチンコ店へ向かい、閉店近くまで遊ぶ。後遺障害のあるはずの右手を何不自由なく使ってパチンコ玉を弾いており、市山と透はその様子をビデオカメラに収めることに成功した。

2

翌日、市山と透が訪ねたのは交通事故の加害者、誠である。保険会社から知らされた住所に赴くと、築40年以上と思われるつましい木造アパートがあり、仕事は非番だという誠が在宅していた。トレンチコートとソフト帽でハンフリー・ボガートを気取り、`男、に戻っている市山がいんぎんな口調で誠に質問した。

「保険会社の依頼を受けて、交通事故のことを調べてましてね。基本的な確認ですが、被害者の**健太さんとは事故前、面識がありましたか」

「いえ。事故の時が初対面です」

「あなたは事故当日、レンタカーに乗っていましたね。どうしてレンタカーを借りていたんです？」

「自分の車が故障していたんですよ」

「レンタカーに乗って、どこに行こうとしてたんでしょう？」

「いやあ、半年も前のことだから、よく覚えていませんが、ちょっとドライブしていただくと記憶しています」

「なるほど。よく分かりました」

市山は他愛ない世間話をしばらく続け、誠のアパートを辞した。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに戻ってきた透が口を開く。

「デートでもないのにレンタカーをわざわざ借りて、`ちょっとドライブ`というのは怪しいですね」

「レンタカーで交通事故、おまけに長期入院とくれば、保険金詐欺の典型的な三題噺よ。それに被害者と加害者がグルだということも、よくある話。交通事故が偶然でないとしたら、二人の接点は何？ トオルちゃん、調べてみて」

健太と誠の接点はほどなく明らかになった。病院を抜け出した健太が赴いたパチンコ店で、誠と肩を並べて談笑しながらパチンコに興じていたのである。

3

大学を卒業して入った会社は人員削減のおありを受け、仕事は増える一方で、平日の午前様や休日出勤など当たり前。自宅には寝に帰るところか、ちょっと仮眠するため立ち寄っている感覚だった。にもかかわらず、リストラ含みの配置転換を命じられたのが2年前。長年担当した得意先がライバル会社へ乗り換えると通告してきた直後のことだ。価格競争に敗れたのか、誠が嫌われたのか、理由は分からない。

ここ何年もノルマに達せず、居心地が悪くなっていたことから、思い切って会社を辞めることにした。雀の涙の退職金を受け取って10年以上勤めた会社を飛び出し、失業保険をもらいながら連日ハローワークに通ったものの、転職を有利にできるのは20代か技術職だけだということを知り知る。特別なスキルや営業力、商品知識もない30代の誠を正社員として雇ってくれる会社などどこにもなく、引っ越しや倉庫作業のバイト、警備会社のガードマンと、日雇いの現場を転々とするようになる。

何をやってもうまくいかない。貧乏神に取り憑かれてしまったのか。最初のころはそんな不満を酒で紛らわせていたが、やがてその矛先は妻に向かう。日雇い仕事で面白くないことがあると、その鬱憤を晴らすように暴力をふるうようになったのだ。最初は小突く程度だったけれど、酔うと見境がなくなって妻の体はアザだらけとなり、それを知った義父母が警察を呼ぶ騒ぎがあって、あっけなく離婚が成立した。

一人暮らしになると、ますます生活は荒れ、日雇いで得た収入のほとんどをギャンブルや酒で使い果たす。生活費はサラリーマン時代に作った数枚のカードローンが頼りで、気が付くと限度額まで使った多重債務者に陥っていた。

そんな折、行きつけのパチンコ屋でライターの貸し借りをしているうち親しくなったのが健太だった。どこかの会社社長のボンボンとかで、気前のよいところがあり、何度か酒をおごってもらったことがある。パチンコで2万円負けたある日、「借金があって、このままじゃ首を吊るしかないよ」と冗談めかしてぼやくと、健太が切り出した。

「儲け話があるけど、あんたも乗るか」

それは悪魔の誘いのように聞こえた。

4

健太はその後、保険会社に「主治医から、このまま治療を続けていても症状は改善しない、と診断された。このあたりで後遺障害の等級を認定してもらい、慰謝料を確定したい」と持ちかけてきたという。

一方、市山は依頼人である保険会社の査定部門担当者に「今回の交通事故は健太と誠が共謀した刑事犯罪の可能性が高い」と報告、担当者は「社に持ち帰って対応を検討したい」と答えた。担当者を見送った透が、市山に聞いた。

「保険会社はやつらを告発しますかね、所長」

「それはどうかしら。このレベルでの不正請求はかなり頻繁にあるのよ。いちいち告発して関わり合いになると、保険会社は警察の取り調べや裁判で時間ばかり取られてしまうからね」

健太が保険の請求を取り下げたのは、その数日後のことである。そして保険会社は市山の推察通り、この一件を表沙汰にしなかった。

査定部門の担当者によると、健太の父親は石川県内に多くのチェーン店を持つ中堅会社の経営者だという。健太は1年前まで父親の下で働いていたが、会社の金を使い込んで解雇されている。この「ドラ息子」は派遣社員などをして食いつないでいたが、仕事はどれも長続きせず、あげくの果てにギャンブル仲間だった誠を誘い、保険金詐欺を実行したものらしい。

「健太にとって幸いだったのは、父親の会社が依頼人である保険会社の大口顧客だったことよ。父親は保険会社に、もし息子を告発すれば自社の保険契約をすべて解除する、と圧力をかけてきたらしいわ。営業サイドとしては多少の不法行為に目をつぶっても、大口顧客の売上げを優先したわけね」

「すでにやつらに支払われた入院費や休業損害などは返ってこないんでしょう？」

「当然よ。返してもらおうとすれば裁判を起こす必要があるからね」

「結局、やつらは甘い汁を吸ったわけですか。なんか釈然としないなあ」

「交通事故の保険金詐欺は一昔前までヤクザが相場だったけど、今回の連中のようにこれから、一般人による犯罪がますます増えていくでしょうね。味をしめたあの連中もきっとまた、やると思うわよ」

5

市山の予言は的中した。半年後、健太と誠がまたしても追突事故を起こしたのである。ただし、前回被害者だった健太はレンタカーで追突した加害者側に、加害者だった誠は今回、追突された被害者に立場を変えていた。その話を伝え聞いた市山が嘆息した。

「レンタカー会社と保険会社は前回と違うらしいけど、同じ金沢市内で追突事故とは呆れてモノが言えないわね。手口が雑というか、安直というか。あいつらバカ？」

市山と透が市内のとある民間病院に様子を見に行くと、首にコルセットをしたパジャマ姿の誠が院内の食堂で情報端末を操りながら時間をつぶしていた。この日の市山は、フリルがたくさんついたブラウスとフレアスカート、ツインテールのカツラにはティアラを乗せている。

「今日は、はるな愛ですか！」と透が思わずツッコミを入れると、組んだ両手の上にあごを乗せた市山が「見慣れた自分に満足しないで、いろいろトライしてみることが美しさにつながるの」と微笑んだ。

「所長のどこをどうつなげても美しさにはなりませんよ！ それで所長はあいつらを放置しておくんですか」

「そうねえ……どうしたものかしら」

しばし小首を傾げていた市山が軽い足取りで誠に近づくと、その耳元で何事かささやいた。振り向いた誠が女装した市山に気づき、たじろいだ姿勢のまま、凍りつく。スキップしながら透の元に戻ってきた市山が言った。

「さ、トオルちゃん、帰ろうか」

「あいつにいま、なんて言ったんです？」

「あなたのやってることは犯罪よ。いつか必ず天罰が下るから、って」

市山がウインクして続けた。

「彼にかけられた魔女の呪いを解いてあげたかったのよ。おとぎ話の世界なら、さしずめ白雪姫や眠れる森の美女にキスして呪いを解く王子様の役どころね。あたしは本来、お姫様なんだけど、今回は特別。これで彼が目覚めるといいわね」

「いやいや、所長は見た目、呪いをかける魔女、むしろ地獄からの使者ですけどね！」

「トオルちゃんの意地ワル！ あたし、グレてやる！」

市山がほおを膨らませ、「プン！」と怒って見せた。